

北河内地域の生活環境の再構成に関する 環境デザインの研究

Research on Man-environment and Environmental Design in Kitakawachi Region

主任研究員： 谷口興紀

分担研究員： 植松曄子、榊原和彦、中川等、川口将武

平成 16・2004 年度の研究成果の特色は、北河内再生の仮の 3 次元的ヴィジョンが、まだ一種の図式ではあるが、GIS を援用して作成されたことである。これは研究について文で表現するだけでなく、北河内の具体的地形に基づいた 3 次元的、擬似的 4 次元図形で表現し考えてみようという方法論の新しさを意味する。CE2004 年に、名目的 100 年後の CE2100 年の図を描くことは、ある意味で荒唐無稽な試みであると取られるかもしれないが、図形を描いて考えるということは、文を書いて考えるより、より現実的側面がある。すなわち、文では、容易に「すべて」「あるゆる」などと書くことができるし、また「非・・・」「・・・でない」と書くこともできるが、図形ではこのような意図をもつ図を描くことは出来ない。「すべて」「あらゆる」を意図したとしても、描かれているものは、部分や一部である。また、「非・・・」「・・・でない」を意図したつむりの図は、「あるもの」を描いているにすぎない。「あるもの」を描いた図に×をつけても、その意図は伝わっても、それは何かと言うことは描けていない。つまり北河内の具体的地形をベースに図を描くことにより、図像のもつ現在化の力により、文で書くよりも現実化の方向に一步を進めることになる。このことを「環境デザイン規則 04」として定立する。(描かれた図の参照先は、榊原研究の注 1 に記載されている。) この図像と各分担研究との関連を述べる。

榊原研究は、上述のヴィジョンを今までの研究成果に照らして、その実現可能性をチェックするものであるが、地理学的な棲み分けがなされており、相互に矛盾を呈するものではなく、互いに補完的であることが確かめられている。つまり、そのヴィジョンが与えるインパクトほどは、北河内地域全体を改変するものではないことを意味する。ピンポイント的に見るととんでもないことのように思えることも、もし駅前再開発における権利変換のようなシステムに裏打ちされるならば、より精密な実現可能な代替案が作成可能になり、実現に向けて歩を進めることができる。

植松研究は、いわばピンポイント的に北河内地域の生活環境の再構成の具体的手段の一つに実際に着手していることを示す。すなわち、先のヴィジョンの中の建物やその中の一室にズームインするときに展開される風景を先取りしていると言える。

川口研究は、歩行ルートについて英国に調査に行き、長くても 1 日で完結するショートコースと数日間または数週間かけて踏破する長距離コースなどの実態の報告である。特に夜を過ごす長距離コースは、自然の時間、つまり昼間と夜間とを合わせた 24 時間を体験する歩行ルートであり、それに比べると、いわゆる 24 時間都市志向は、昼間を 2 倍にするだけであり、自然の時間都市、真の 24 時間都市志向とは言えない。その意味で、先のヴィジョンにおいて展開する生活のあるべき姿をイメージさせる。

中川研究は、交野市の 18 世紀前半にさかのぼる古民家の調査について述べるが、上屋・下屋構造と骨組構造により生活様式の変動に追従してきたことを即物的に跡づけているが、これは、最近の都市の持続可能的構造におけるスケルトン提案の縮小版がすでに行われていたことを示すとも解される。もし

18世紀前半から現在までの生活変化の内容が跡づけられるならば、それとの比較によりこれからの生活様式の変動の内容を予測することができ、先のヴィジョン修正へのフィードバックが可能となろう。

谷口研究は、都市計画の目標年次が、昨年の大東市のその25年先に比べ、交野市、四条畷市は10年先であることにより、都市計画的施策が限定されるという重要な指摘があり、さらに安易な「和」「職業や思想、信条を越えて」という点の不分明さと多くの人々が寄り集まって成り立つ都市における施策の決定に対する利害対立者（ステークホルダー）間の調整についての手続きの研究がなされなければならないことを指摘している、言い換えればどのように計画の地平を共通にするかという研究の必要性であり、その一つとして上で述べた図的ヴィジョンの提示も位置づけられる。

このようにみえてくると一見バラバラに見える分担研究テーマは、CE2100年ヴィジョンにおいて、それぞれ処を得ていることが確認できる。

交野市、四条畷市の都市計画書の分析から — 北河内地域7市の都市計画書と地理情報データに関する研究 —

谷口 興紀(工学部)

交野市、四条畷市に共通する特徴は、合計特殊出生率を1.29と想定した人口推計において、北河内7市の全体の人口が、100年後に約1/4となるにもかかわらず、この2市の人口の値は、現在よりもあまり減らないことである。そこで、「交野市総合計画2001～2010 水と緑が暮らし彩る『星のまち☆かたの』」（交野市企画調整課編、平成13・2001年）（以後「交野市」と呼ぶ）と「第4次四条畷市総合計画 発展に緑と歴史をいかすまち ひと、まち、みどりがきらりと光る 文化・福祉都市をめざして」（四条畷市企画財務部企画調整課、平成8・1996年）（以後「四条畷市」と呼ぶ）を分析して得た知見を契機として21世紀型都市計画のあり方について述べる（以後「市」は、「交野市」と「四条畷市」とを意味する）。

計画期間は、両「市」とも10年後を目標年次としており、大東市の25年後に比べてはるかに短い。目標年次が終了した時点で、その成果を問われて応えられるためには、現時点において事業として実施可能なことに焦点が当てられることになるが、それでは10年以上かからねば達成できない長期的目標は、考慮の外に置かれてしまう。10年のような長いようで短い計画だけでなく「百年の計」というような長期的計画的視点を加える必要があるのではなかろうか。

両「市」の目標都市像は、上に示した副題に示されているが、そのような計画の実現後の景観的イメージの全体図は、両「市」とも描かれていない。文章だけではなく仮にも形に描くことも必要ではないか。広域的な計画については、「交野市」と「四条畷市」とでは扱い方が若干異なる。「四条畷市」では、3編構成の第1編総説第4章3節において、大阪府新総合計画・近畿の創生計画（すばるプラン）、第四次全国総合開発計画、そして新北河内地域広域行政圏計画に触れられているが、「交野市」では、第3部基本計画第6章第4節というように、3部構成の最後尾において取り上げられており、記述内容は、新北河内地域広域行政圏計画のみを共通にするだけである。

「四条畷市」では、市内が3つのゾーン分節されている。「交野市」では、5つの地域区分となっている。また、「四条畷市」の作成が、平成8・1996年なので今で言うインターネット普及以前であり、パソコン通信と呼ばれていた時期である。

市民アンケートは、「四条畷市」では市民意識調査と呼ばれている。「交野市」では、市民主体・市民

参加・市民参画などが唱われている。両「市」とも市民アンケートの結果に基づいて諸種の位置づけや判断がなされているが、プラス面においてはそれでよいが、市民（住民）は多様であり、利害対立者の集合でもあるので「職業や思想、信条を越えて」（「交野市」134頁の用語「コミュニティ活動」の説明）や市民憲章「和（自然と、文化と、人と）」（「交野市」）は、言うは易いが、計画的立場からは、そのことをどのように実現していくかについての研究が今後必要である。

北河内地域の生活環境とクラフトについて

植松 暁子(工学部)

北河内地域の代表的なクラフト、河内木綿の研究で周辺地域の拡大研究が必要とされ一昨年夏、丹波布の調査に兵庫県氷上郡青垣町を訪れた。河内木綿と同様、明治時代になり洋紡糸の輸入、近郊の西脇市に紡績工場ができ零細農民は賃金労働者として働くようになり、やがて丹波布も衰退したが、青垣町は平成10年青垣町の運営で丹波布の技術を伝えていくために、常設の施設として「丹波布伝承館」を開設した。糸紡ぎ場・草木染色場・機織り場を設け伝習生を育成し、館内では機織りや草木染めの全てがわかる展示コーナー・体験コーナー・ビデオコーナーなどを設けている。また、草木染め教室や機織り講座などもある。立地が、「道の駅あおがき」の中にありバスや車での見学者が多く、丹波布の普及・伝承には効果大である。そこで、河内木綿も保存・伝承の現状を北河内地域、中河内地域を調査した。

北河内地域の7市、枚方市・寝屋川市・門真市・守口市・交野市・四条畷市・大東市について河内木綿に関する資料や資料館などが存在しているかを調査した。北河内の北部の枚方市は枚方市立宿鍵屋資料館、寝屋川市は寝屋川市立埋蔵文化資料館、西部にあたる門真市は門真市立歴史資料館、守口市は文化歴史資料館、交野市は交野市立歴史民俗資料館、四条畷市は四条畷歴史民俗資料館、大東市は大東市立歴史民俗資料館を訪れ調査したが、いずれの市も河内木綿に関する資料はほとんど見あたらなかった。中河内地域の3市、東大阪市・八尾市・柏原市についても調査した。東大阪市は東大阪郷土博物館が1972年開館以来衣類、布団、のれん、風呂敷、のぼりなど河内木綿の収集や、機織り機と綿くり機、糸車などの部品も展示している。また、在来種といわれる木綿の種で河内木綿の栽培もしている。八尾市は歴史民俗資料館で河内木綿の収集展示を、河内木綿藍染保存会では毎年「甦る河内木綿・藍染展」と文化講演会開催している。また、八尾市民の染色作家が河内木綿の復元を行っている。八尾市教育委員が20年前八尾在住の染色研究家「辻合喜代太郎博士」の指導で小学校の空き教室で「河内木綿伝習所」を開設し現在も月2回20人のメンバーが綿を紡ぎ、布を織っている。柏原市は柏原市立歴史民俗資料館があり昨年は大和川付け替え300年記念企画展が開催され「絵図に描かれた大和川」付け替え前の大和川、付け替え工事と大和川、付け替え後の大和川絵図による展覧会であった。付け替え後旧川床が木綿の栽培に適してその後、河内木綿が隆盛した過程を大和川の絵図から学べた。中河内地域の3市の民俗資料館からかなりの河内木綿の資料が収集され展示や復元に努めているのは、河内木綿の中心地域であったためと思われる。

私の構想は、八尾市や東大阪市の様な資料館はつくりたくない。環境デザイン学科の視点で「ものづくりの場」をつくる。再生とは広辞苑によると蘇生、復活、再誕、新生など記載されている。このコンセプトで、この数年大阪梅田茶屋町画廊で毎年織りによる個展を開催している。ただ再生するだけでなく、アートとして蘇らせるなどを試みている。環境を考えて捨てられる布の再生を市民と共に行う「ものづくりの場」を開設の実現を計画中である。

北河内地域の伝統的集落地区環境および 非日常的生活環境の再構成に関する研究 — その2 —

榊原 和彦(工学部)

筆者らは、先に北河内地域の名目的 100 年後 (CE2100) の方法論的ヴィジョン (以下「ヴィジョン」と呼ぶ) を 3 次元的に描いたものを発表している (*1)。それについて、「模式図的なヴィジョンが地域の地理学的状況に合わせて描いてあるので分かり易い」という評価がある一方で、「あまりにも現実から隔たりすぎている感も持つ」という批判があり得る。しかし、環境デザインの立場からは、北河内地域の再生の実現は、そのヴィジョンを実現に先立って描出すことなしにはあり得ないので、たとえそれが非現実的に見えようと、まずは何らかのかたちで描かざるを得ない。そうすると、必要となるのは、描かれた「ヴィジョン」が現実的情况に照らして矛盾やコンフリクトを生じている (これを「抵触」していると言うことにする。) かどうかの検証である。そこで、前年度までの調査・研究に引きつけた観点からヴィジョンを検討することを試みた。

① 中垣内集落の石垣景観に関わるデザイン・サーベイと“石積み”に関わる調査：中垣内集落は、台地にあり、「ヴィジョン」の田んぼ部分とは抵触していない。「ヴィジョン」にとっての空白地域の補完研究としての意義がある。

② 生駒越を中心とする旧街道ネットワークの調査：「ヴィジョン」では交通路の再編成も考慮に入れているが、歴史的な街道パターンは原則的に保全することを考えているので抵触せず、むしろ「ヴィジョン」のリファインに資する。

③ 平野屋新田会所および周辺のまちづくりにかかわる調査：平野屋新田会所周辺は、歴史的保全地区として残していくことは、地域の景観構成を豊かにするものであり、また会所が構築された当時の風景を浮かび上がらせるものであり「ヴィジョン」にとっても好ましい。

④ 生駒山地における交通路の形成に関する調査：北河内地域の都市化は、粗っぽく言えば、「国鉄整備期」「私鉄整備期」の積み重ねで整えられた JR 学研都市線、京阪電車の駅の近くから人々が住み始めたことに始まり、やがてマイカー時代の到来と共に駅から遠くへとスプロールして行き、現在に至っている。国税調査データ (平成 7 年) の町丁別世帯統計によれば、両沿線近くの世帯は、高齢・独身の割合が多いので、やがて人口が入れ替わる可能性が高い。「ヴィジョン」は、このことを踏まえた、その先を取り扱っている。

⑤ 生駒山地地区における行楽地の形成に関する調査：複合行楽地としての生駒山地は、「ヴィジョン」では、手つかずに残されている空白地であるので、抵触してはいないが、将来の「ヴィジョン」において積極的に表現されることが望ましい。

このように見てくると、「ヴィジョン」は、今までの研究成果とは矛盾してはならず、また研究成果の多くは、「ヴィジョン」を補完する役割をもつものと言えよう。

*1 谷口興紀、榊原和彦、「40 周年教育研究の課題— 50 周年の暁に向けて —」大阪産業大学学会報 40 号、2005 に転載の「図 北河内地域 2100 年 (2005 年版)」、オリジナル出典：O. Taniguchi et al. “The Case Study of the Regeneration of Kitakawachi Region by a New Planning Method for the Sustainable Urban Environment” CUPUM05、平成 17・2005 年 (URL: <http://128.40.59.163/cupum/searchPapers/>)

北河内地域の伝統的集落地区環境および 非日常的生活環境の再構成に関する研究 — その1 —

榊原 和彦(工学部)

本研究の目的の一つは、北河内地域における伝統的集落を中心とする地区の環境デザインに関わる調査・分析を行い、再構成のための提案を行うことである。このために、昨年度から引き続いて、以下のような調査・分析を行った。

- ① 中垣内集落の石垣景観に関わるデザイン・サーベイと“石積み”に関わる調査：山麓の傾斜地に立地する中垣内集落には、石垣が多く、それが集落景観を基調をなしている。そこで、そのデザイン・サーベイを行った。さらに、住民へのインタビュー調査等により、それらが“生駒石”という地場材を用いてつくられていることを見出した。調査の結果、修復・保全が必要であるとの結論に達した。
- ② 生駒越を中心とする旧街道ネットワークの調査：「明治関西地図集成」（明治 17～23 年）に基づいて、生駒山を境とする河内・大和にまたがる地域の「守口・清滝街道」「龍間越古堤街道」「善根寺越え」「辻子峠越」「暗がり峠越奈良街道」を中心とする旧街道を里道も含めて道の分類別に図化した。これにより、旧街道のネットワーク構成が明らかとなった。
- ③ 平野屋新田会所および周辺のまちづくりにかかわる調査：新田会所建築活用策の調査、銭屋川の水辺環境調査等を行い、「歴史共生するまちづくり」という視点からの平野屋新田会所・歴史的環境・自然環境の保全をまちづくりに生かしていく方策を探った。

本年度の研究の今一つの目的は、北河内地区にありながら、これまで研究対象地域として取り上げられることのなかった都市後背地としての生駒山地地区について、大阪を中心とする近畿全体の非日常生活に大きな役割を担っていることに着目し、調査・研究を行うことであった。

- ① 生駒山地における交通路の形成に関する調査：「街道整備期」「国鉄整備期」「私鉄整備期」「道路整備期」に分けて交通網整備状況を調査し、併せて大阪および奈良の都市形成との関わり、生駒山地地区目的地との関わりなどについて調査・考察した。
- ② 生駒山地地区における行楽地の形成に関する調査：生駒山地は、とくに大阪市民の行楽地として非日常生活の中心地の一つとなってきたが、その交通網との関わりに着目しつつ歴史の変遷を調査した。
a.江戸期に街道・水路が整備されて以降、野崎観音、石切神社など大阪側山麓における宗教施設が行楽地となった。
b.近鉄電車開通による宝山寺、信貴山朝護孫子寺が行楽地となり門前町が栄えた。
c.ケーブル線の開通によって生駒山頂遊園地がつくられ近代的レジャー施設による賑わいが誕生した。
d.ドライブウェイの開通によって山頂部が多様なレジャーの要素を含む行楽地へと変化した。このように、交通形成に伴い、“参拝”から多様な集客要素による複合行楽地へと変化した。

以上

(注) 本稿は、手違いにより昨年度に掲載できなかったため、本年度に掲載するものです。これにともなうて、昨年度報告(大阪産業大学産業研究所報第 26 号、51 頁、2003 年 12 月)を取り消しといたします。

北河内地域の伝統的な生活環境と民家に関する研究

中川 等(工学部)

これまで長期的共同研究組織(北河内)の分担研究において、大阪市近郊として近年の変容が著しい北河内地域について、現環境の基盤構造をなす伝統的な生活環境と民家の諸相及びその形成過程を明らかにした。16年度は交野市の伝統民家K家について建築調査を行い、主屋が18世紀前半にさかのぼる北河内屈指の古民家であることが判明したので、詳細調査を実施して保存・活用に向けて調査報告書をまとめた。

K家は古く地侍の末裔で、江戸時代に庄屋をつとめた旧家である。広い屋敷の正面に門・土蔵3棟・離れが並ぶ重厚な表構えをもつ。屋敷の中ほどに入母屋造茅葺の主屋が建ち、その上手やや前寄りに寄棟造茅葺の座敷棟が接合する外観は見応えがある。主屋は整形4間取りを基本として広敷を備えること、土間に煙返し梁を掛けて竈の煙が居室側に流れ込まない造りをもつことなど、河内・大和地域の典型的な民家形式を伝えている。また主屋の上手表室を仏間として素朴な構造・意匠につくり、別に書院造の座敷を付設するところは当地域の上層民家にしばしば共通する構えである。建築年代については、様式手法と過去帳・系図の内容により主屋は18世紀前半、座敷棟は19世紀後半と推定した。

また、近在の山添家住宅(1705年/重文)や北田家住宅(18世紀前期/重文)など類例比較に基づいて、江戸時代中頃の北河内民家の地域的特徴と時代的変遷について考察を加えた。4間取り型民家の建築年代を判断する主要な編年指標として、納戸まわり、土間・居室境、居室の外部開口の形式が指摘されている。17世紀の民家では仏間・納戸境と台所・納戸境の両方が閉鎖的で、18世紀に入るとどちらか片方が、18世紀末頃から両者ともに開放的になる。土間・居室境及び居室の外部開口の柱間装置も閉鎖的な形式から開放的な形式へ変化する。特に、居室の外部開口は1間ごとに柱が建ち閉鎖的で古い形式を保守する一方、土間・居室境や台所・納戸境は比較的開放的な新しい構えに転じる。この新旧形式の共存の仕方は江戸時代中頃の当地域の特徴と考えてよいだろう。

K家は、幾星霜を経た古民家だけに数次の改造を経て、上屋の基本躯体を継承しつつ下屋まわりに増改築が加わる。大規模な伝統民家を住まいとして活用する場合、規模の大きさが逆に負担となることがあるが、一般に増築部分を撤去・復原することで適切な規模と構造に縮小され、また柱や梁など骨組みを保存しながら間仕切り、天井、床を再構成することで新しい住要求に対応した生活空間に一新されることが多い。伝統民家のもつ上屋・下屋構造と骨組構造は、時代とともに変化する生活様式に柔軟に対応する特性をもっている。当家は地域の歴史的景観の要としても貴重であり、現在、所有者と設計者とともに多面的な観点から保存・修復あるいは再生・活用に向けて可能性をさぐっている。

北河内地域における 歩行路ネットワーク再編のための基礎的研究

川口 将武(工学部)

日本の郊外部や田園地域において歩行路ネットワークを形成していく上で、最も参考になるとと思われる英国のパブリックパス（通行手段の制限により「フットパス [footpath]」、「ブライドルウェイ [bridleway]」、「バイウェイ [byway]」の3種類に分けられる）を歩き、ルート設定、空間・施設整備、管理・運営の視点から歩行環境の実態調査をした。

調査コースは、英国人が数日間または数週間かけて踏破する本格的な長距離歩行路を4コース、2～3時間、長くても1日で完結するショートウォークを5コース設定した。

(1) 長距離歩行路 (Long Distance Paths) のロングウォーク

スコットランド公式道を1コースと田園地域委員会 (Countryside Commission) が認定し、管理・運営する「ナショナルトレイル (National Trail)」を3コース、計4コースのパブリックパスを調査した。

・ウエストハイランドウェイ (West Highland Way)：スコットランド、英国北部の湖水地域にあるスコットランド公式道。全長152kmのうち10kmを調査。種別はフットパス。

・ペナインウェイ (Pennine Way)：イングランド、英国中部の農村地域にあるナショナルトレイル。全長431kmのうち15kmを調査。種別はフットパスとブライドルウェイ。

・テムズパス (Thames Path)：イングランド、英国南部の都市中心部にあるナショナルトレイル。全長288kmのうち4kmを調査。種別は不明。

・サウスウエストコーストパス (South West Coast Path)：イングランド、英国南西部の海岸地域にあるナショナルトレイル。全長987kmのうち4kmを調査。種別はフットパスとブライドルウェイ。

(2) ショートウォーク

都心や郊外での日常的なウォーキング環境を調査するため、リージェンツパーク、ハイドパークといったロンドン市内の公園とキューガーデン、パンプトンコートパレス、チャッツワース等ロンドン近郊、郊外の庭園につながる歩行路について調査した。

河川や運河といった水辺を活かし、とぎれることなく遊歩道としてネットワークさせている点や背割り街区となっている住宅地において裏庭側に人1人分程度の幅の狭い道をつくりだし、短距離でもそれらを少しずつ連続させ、ネットワークさせている点は、これからネットワーク手法を考えていく上で参考となった。

また、文献資料として、英国陸地測量局 (Ordnance Survey) 発行の1:25,000の地図 (Explorer)、公式ガイドブック (National Trail Guides) とランブラーズ協会発行 (The Rambler's Yearbook)、ウォーカーの規則 (The Countryside code) 等の資料を収集することが出来た。